

INTERNATIONAL ARTISTS REVIEW
ART PICTORIAL

NO.34

美術画報



東洋美学芸術選奨

現代作家対談特集

チャルトリスキ・コレクション

女性美の500年

エレガンスの系譜

パウル・クレー

旅のシンフォニー

2002年

3月31日(日)まで

休館日＝月曜日／2月12日、3月22日[ただし、2月11日(月)は開館]

開館時間＝午前9時30分から午後5時まで[ただし、入館は4時30分まで]

主催＝神奈川県立近代美術館／東京新聞

後援＝スイス大使館／日本パウル・クレー協会

協力＝日本航空

●別館同時開催「湘南の5人の画家－萬鉄五郎・岸田劉生・朝井国右衛門・島海青児・原 精一」展

神奈川県立近代美術館[本館]

〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-1-53(鶴岡八幡宮境内)

tel.0467-22-5000 fax.0467-23-2464

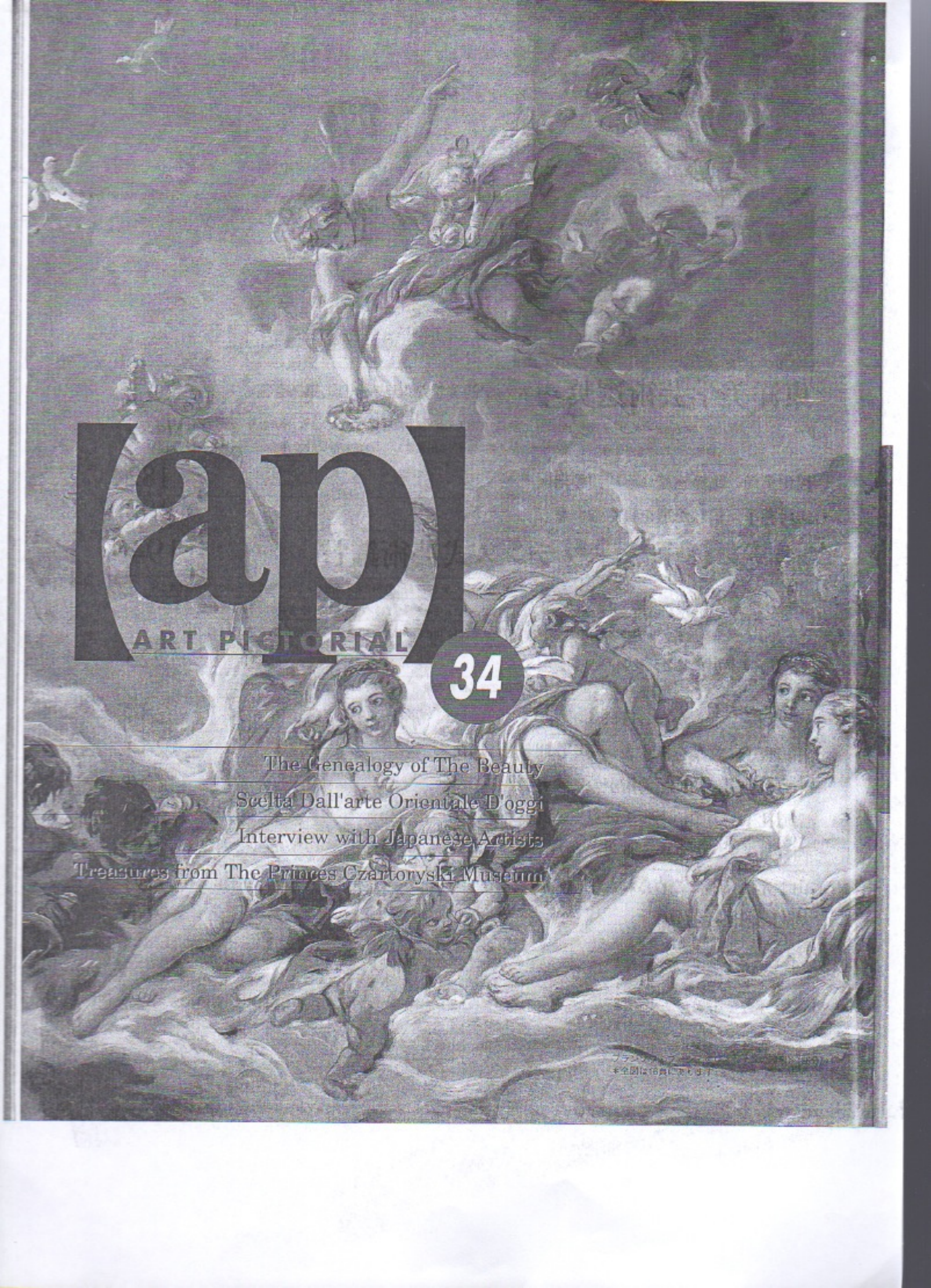
<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/kinbi.htm>

入館料＝一般1000(900)円／学生850(700)円

*()内は20名以上の団体料金、高校生以下および65歳以上の方は無料

Paul Klee
and
His Travels

《公園にある市》1938年、個人蔵、スイス



lap

ART PICTORIAL

34

The Genealogy of The Beauty
Scelta Dall'arte Orientale D'oggi
Interview with Japanese Artists
Treasures from The Princes Czartoryski Museum

フランス・ル・ブーシェ
キ全図は15頁に於けます



表紙：レオナルド・ダ・ヴィンチ《白貂を抱く貴婦人—チエチリア・ガッレラニの寓意的肖像画》1490年頃
裏表紙：ヴィンチェンツォ・ピアッツォ・カテーナ《聖母子》1510年頃

東洋美学芸術選奨 ヴェネツィア的美学から見る今日の東洋芸術 161

伴 享子 162/廣田保子 164/山本尚政 166/渡辺徹夫 168/瀬沼章治 169/大志保紫水 170/増田 昭 172/石田観仙 173
柏村貞江 174/佐藤光峰 176/櫻井秋水 178/河口智子・多田礼子 179/丹野史子・古田富貴子 180/中嶋若根(若隆) 181

黒田英尚 臨場感溢れる瞬間の把握 182

志村和子 信じた道を貫く強い意志 190

クリスチャン・ラングロワによる フランス式芸術鑑賞 194

魚谷多美子 195/大和田愛子 196/小嶋 照 197/市川ユリ子 198/飯山徳明 200/新田モト 201/阿部鉄三 202/向井健敏 204
小山恭正 208/石原健哉 210/細野文平 211/坂口栄一 212/佐々木好恵 213/越智佳子 214/吉村綱枝 215/多田楚白(崇子) 216
梶山和子 218/野尻紫鳳 219/畑 穂芳 220/本村秋英 221/川西恭子 222/池田政敏・吉田邦男 223/遊馬満寿雄 224

イタリア美術展セレクション 225

イタリア彫刻の20世紀 226/シエナ美術展 228/世界遺産ポンペイ展 230/マジョリカ名陶展 232

戸上寛子 清らかなる自信 234

和田杏子 言葉を探すまっすぐな眼差し 244

未完の世紀 20世紀美術がのこすもの 254

栗原礼子 力強いタッチに見える旺盛な創造力 258

西條正子 書とあそぶ世界の魅力 260

山下光葉 墨にこめられた生命の証 264

秀作美術最前線 266

奥家秀生・田中富市 267/越智常春・マサコ・ヴィラール 268/青木京子・有馬常美・宇梶陽子 269
奥村真美・荻須勝博・小倉和宏 270/草ノ井久子・久保田 清・小暮 義久 271/佐藤憲一・芝井志郎・鈴木俊明 272
出口 徹・中村恭子・中村達夫 273/花岡喜八・馬場さち・古瀬和寛 274/本多啓子・松山千夏・宮腰精梧 275
宮崎貴至・本宮 建・飯田利典 276/佐々木辰夫・岩切た津・農坂とよみ 277/安仁屋政汎・坂本福治・藤井文夫 278
淡路利行・浦上宗太郎・大野武夫 279/小嶋 秀・小林 真・時長和弘 280/利岡豊通・西川政明・西村二郎 281
間部一彰・高橋貴紀・竹内阪蔵 282/駒谷正雄・酒井武雄・立野 孝 283/町田宮ますみ・小川和男・越智円玉穂 284
天本 武・阪本仁子・上野時次郎 285/伊佐田靖之・進藤信子・大喜戸民子 286/宮崎康久・高橋 孝・島崎早月 287

美術画報

INTERNATIONAL ARTISTS REVIEW ART PICTORIAL

CONTENTS

特集

エレガンスの系譜

「女性美の500年 描かれたイメージ：西洋と日本」より

徳永幸彦 原点への回帰	22
富田智津子 真摯な心が伝える墨跡	32
歌岡美津子 独自の視点が生み出す色彩	42
辻井盈子 炎と土と心のハーモニー	46
佐々木良治 溢れ出すエロティシズム	56

現代作家美の競演

阿部 勇 61/相原照代 62/(故)大西祐子 64/瀧口甚造 66/関 忠直 68/添田定夫 69/田口順子 70
 武田佳子 71/坪井 茂 72/豊島純三郎 73/端野裕子 74/秦野政七 75/星野善治 76/渡辺俊一 77
 三善マモル 78/有田綾子 80/家木矩子 81/池亀正夫 82/岸 正美 83/小林 徹 84/佐久間芳夫 85
 森下明美 86/牧野伊佐夫 87/仲井信雄 88/所司郁世 90/田村茂直 92/細澤岩夫 93/治田敦子 94
 北岡啓子 98/坂井洋子 99/小野寺重一 100/橋姫 101/大小田恵子 102/日達れんげ 104
 岡本敬一 106/中里隆子 108/深澤静夫 110/江口廣子 112/須佐光子 113/柳澤久男 114
 酒井尚風 115/成瀬志行 116/日比千鶴子 117/松橋南泉 118/谷口草月 119/四十物敦子 120
 岡崎喜代子 122/加藤燕雨 124/菅 章江 126/岡田武雄 128

チャルトリスキ・コレクション展	130
白倉眞麗子 詩と共に歩んでいく人生	134
高石四郎 変わらぬテーゼへのあくなき追求	144
山村新一 問いかける自己の存在	154
キヨッソーネ東洋美術館所蔵コレクション 浮世絵展	160



5

東洋美学芸術選奨

ヴェネツィアの美学から見る
今日の東洋芸術

●執筆・監修

シルヴィア・ヴェスコ

ヴェネツィア大学東アジア美術誌教授助手

ヴェネツィア北斎研究所研究員

現代日本美術との運命的な出会い

日本美術。それは、詩的・文学的に微妙に暗示されている偉大な伝統が読み取れること。外国に由来するものを独自に吸収し、消化する偉大な力。芸術や周囲の世界を読み直すというこの生まれつきの能力こそが、さまざまに表現される日本現代の芸術家の作品をユニークで独特なものにしていると思います。作品を見るたびに感ずる魅力が、日本美術との出会いがいかに幸運であったかをいっそう強く感じさせてくれるのです。

(シルヴィア・ヴェスコ)



Silvia Vesco

Scelta dall'arte
orientale d'oggi



かに F10 [特選]

伴 享子

BAN, Kyoko



こだわりを
見せる
色彩への
情熱

四 年間続いた研究と下積みの結成であるこの作品は、好きな色を塗り込めてよりよく呼応する形に統一しようとする、作家の意志を包み込んでいく。そこで、大胆にも基本の五色を遣んだために視覚のインパクトの強い構図が形成されている。丸まった形でかろうじてそれとわかる「かに」は、はさみを開いて、丸いテーブルの上に置かれている。白い小さな目が、生き生きとした注意深い唯一の点になっている。線はむしろ幾何学的であるが、常に凝縮された、根源的な色彩で表され、循環的な画面上で決定的に交差している。対象を柔軟で不特定の背景に配置する作家の選択は大胆である。輪郭線で限定せずに油絵具を使うことによつて、直接に、積極的に訴えてくるような感覚を観る者に伝えようとする作家の熱意が感じられる。



白い花と果物 F10

【図解】 011 2010

作家は、この静物画にも同じ様式を使っており、ここでは、右に向けて強く均衡を破った構図が、果物籠と柄のある花瓶を対比させている。構図の均衡を創り出そうとする苦心のすべてが、籠にも花瓶にも練り返し白を使っていることから感じとれる。このふたつの対象、籠と花瓶は、互いに支え合っているように思われるが、主として赤と緑で強調されている果物の重みがこの均衡を破っている。画面が単調になるのを避けている。手前のひとつのリングが、はかなくも籠と花を整さため、今しも転がって、テーブルから、そして我々の視界の外へと落ちかかってくるかのようである。

文／シルヴィア・ヴェスコ

出身：昭和12年島根県。岡山大学校。市
美術館。グループ展4回、外展9回



料

享子

廣田保子

HINOYA, Yasuko



華やかで存在感ある重厚な色彩の魅惑



誰かが呼んでいる FB

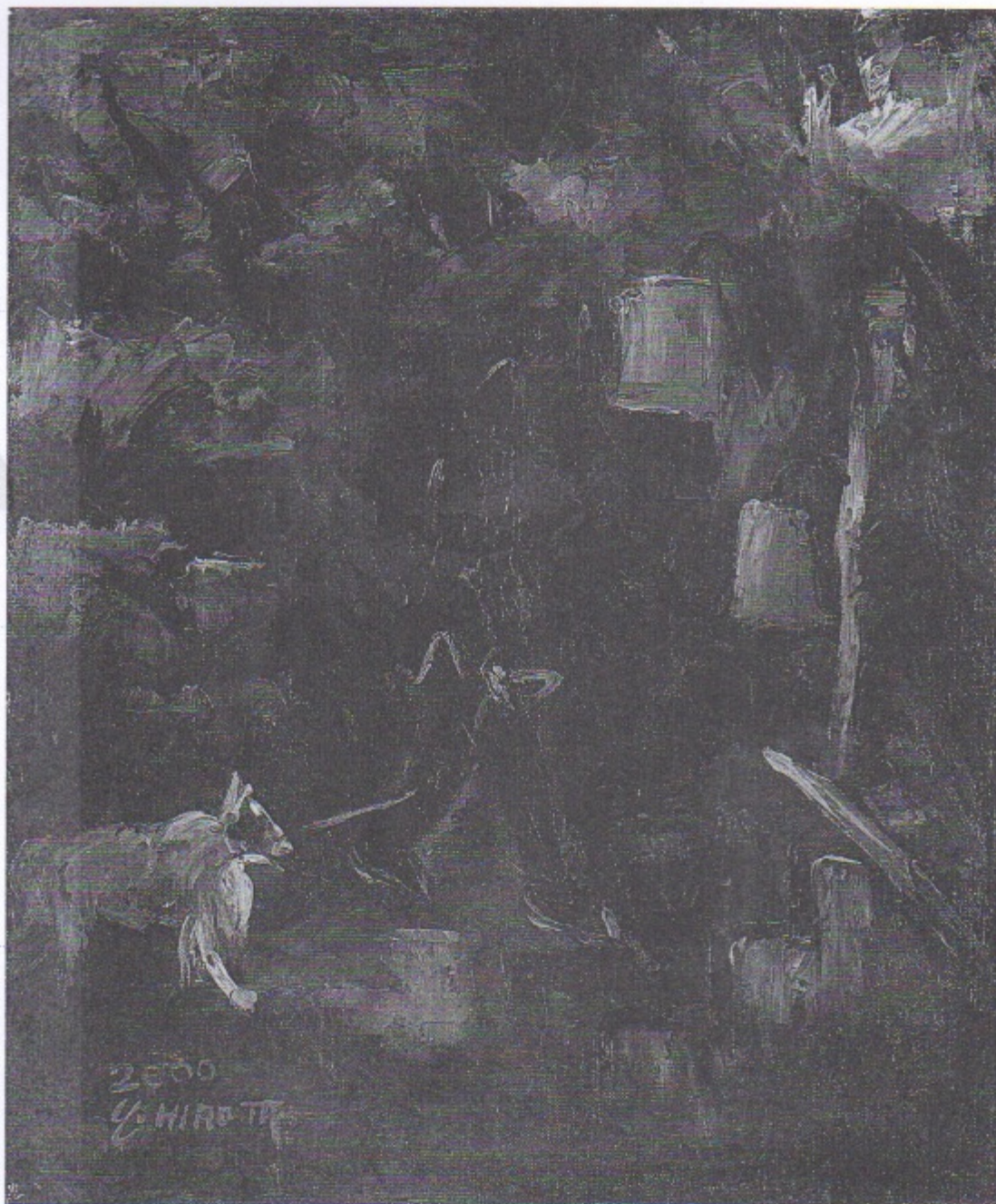
作

家の様式の特徴は、油絵の色によって得られた、濃密で物質的な雰囲気によって、私たちに親しい現実を呼び起こすところにある。この作品においてもまさにそうであり、ここでは、魚や魚のような何匹かの動物が認められ、濃い黄色で描かれ、青い水溜まりに白い高波をなして落ちる滝のようなものに不可避的に魅せられている。すべてが輪郭線なしに描かれており、白で描くという入念な選択がなされなかったならば、そこに組み入れられた背景に溶け込んでしまったであろう。この色彩上の明敏な工夫が視覚効果強調し、確固たるものになっている。

廣田保子



華々たる日本画界の巨匠としての地位を築いた



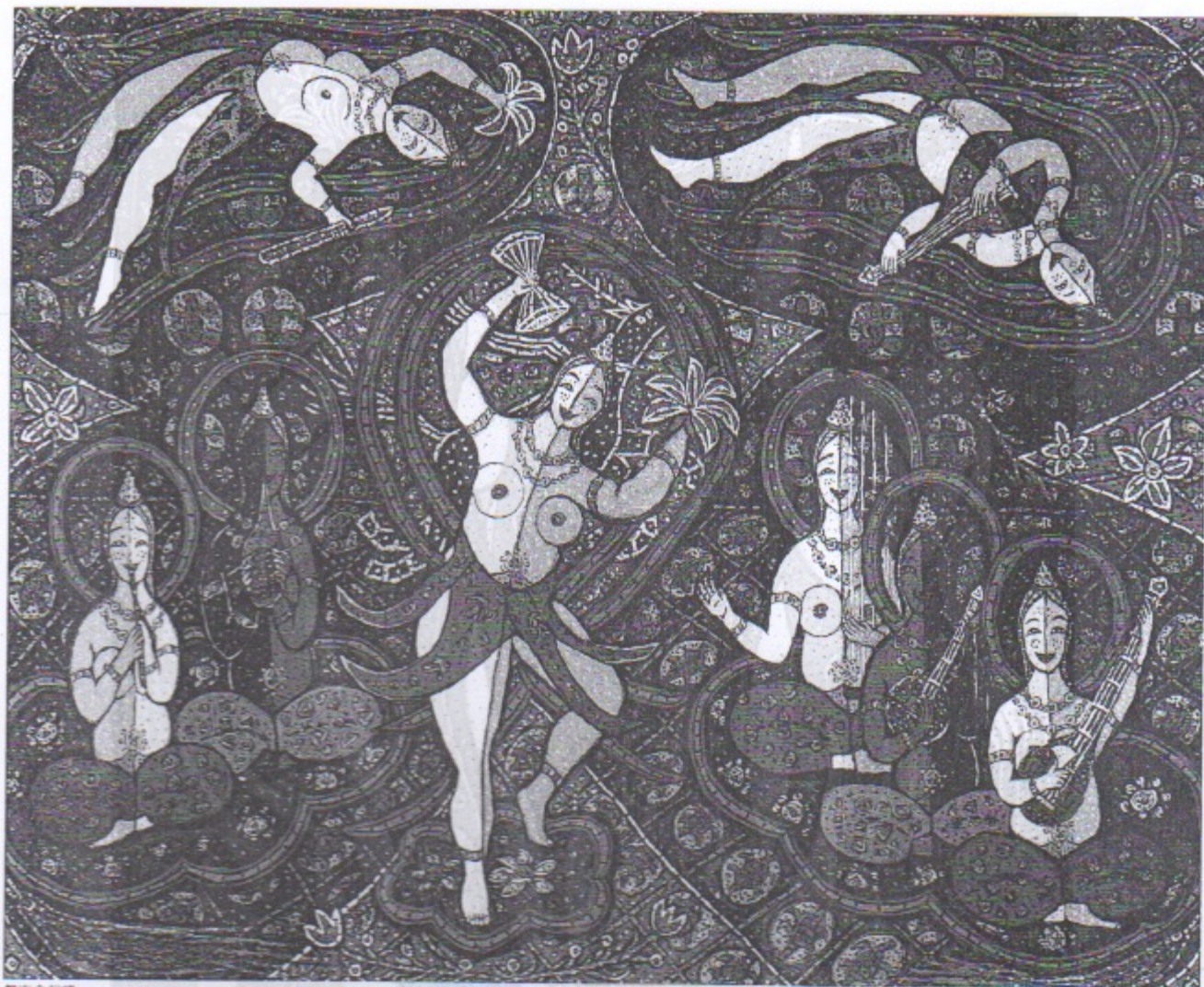
散歩 F8

文／シルヴィア・ヴェスコ

動物世界への好みは主役、という傾向が廣田保子の作品には見られる。帽子を被った黒衣の人物が、いつもの散歩に毛の長い犬を連れていく。ふたつの街灯に灯がともされ、夜であることを暗示している。素早い筆使いで描かれた背景は、森か公園を思わせる。散歩という習慣的な行動が何度繰り返されたかわからない、というかのように、すべてが穏やかな静寂に包まれている。しかし、筆使いの速さ、濃い色の使用、そしてほとんど二次元的な構図が、今にも何事か起こりそうな雰囲気を出している。

文／シルヴィア・ヴェスコ

出身：昭和12年東京都。師：故片山良雄、田中加津子、磯田竹野。東京国際美術協会名誉会員、ハートアートコミュニケーション正会員。国際芸術力・奨励・優秀賞など多数受賞。東京教育委員会、東京都議会議員、ほか。日韓友好相対作家協定、日韓文化親善大使受賞。ローテンブルク市名誉作家認定、日韓友好芸術家賞、日本トルコ芸術親善友好賞、土日本全連会長賞、2001年国際展東京和知事賞、エジプト芸術文化賞。グループ展5回、外展3回。



舞会会図

山本尚政

YAMAMOTO, Naomasa



視覚に直接
飛び込む
点描の
幻想世界

古 代の宮廷舞踏である舞楽の幻想的な表現が、まずインドの国像学的伝統と仏教、そしてそれから点描法に着想を得たような、まったく刷新的で驚異的な手法で描かれている。踊り子と楽士たち（これらも、若々しく上半身裸体の女性たちで表現されている）は、事実、インドの神々のイメージ、それ以上に法隆寺の阿彌陀の極楽を描いた壁画を思わせる。イメージをほしきままにさせない構図感覚は非常に際立っている。空間は、花の咲く枝、花々、ひるがえるリボン、そして花卉型のスカートによって埋めつくされ、それらは飛翔と舞の動きの中を漂っているようだ。点描技術が作品の個々の部分を細部にわたって押さえている。微笑む顔、楽器、光背、着衣の布、宝石が限すのびのびとした喜びの雰囲気が、すべて極めて緻密に描かれている。



天女昇天 100号

天女たちの昇天が、点描法を駆使する作家のこの作品にも描かれている。支配的な青、緑、赤の色が人物の裸体の肌と見事なコントラストをなしている。三人の天女は、弦楽器を手にし、神秘的であまりにも幻想的な空間に浮かんでいる。天女の穏やかな眼差しは観る者までも歌と踊りと理想が交錯する空間へと昇天させていく。インド起源のアブサラスによく似て、天女の容貌は互いに似ている。顔はすべて卵形で、目は大きく、眉はなめらか、真っ赤な唇はくっきりしている。長い髪は柔らかな肩に流れている。

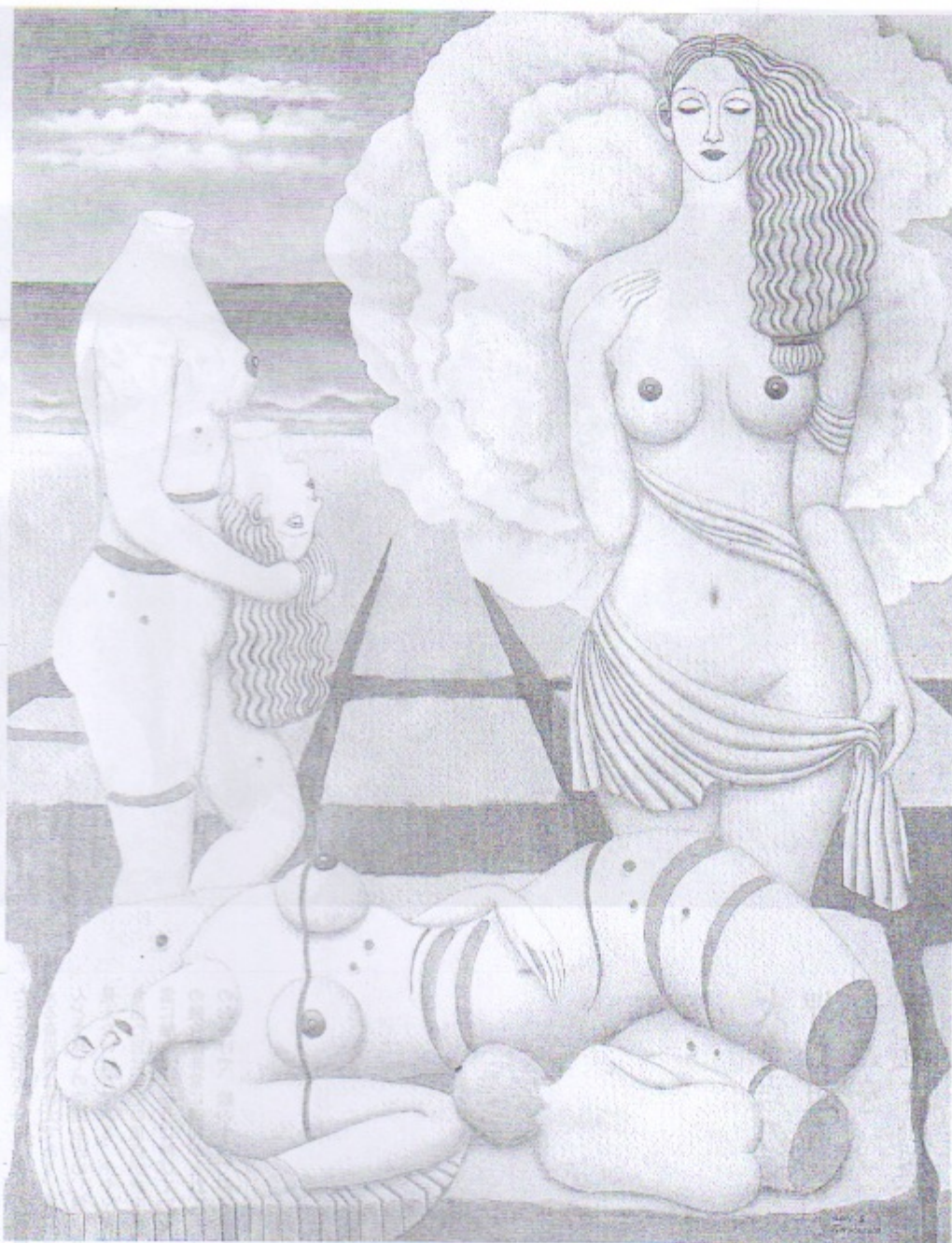
文/シルヴィア・ヴェスコ

出身：大正6年熊本県、京都入道寺師範、大阪美術学校卒、東京中央美術学校卒、海外芸術交流協会会員、ハプスブルグ芸術愛好会会員、芸術家、ゴッホまわりの会長、日露三美術98トレチャコフ美術展認定作家、アートルネッサンス1999・2000アジア芸術祭最優秀賞、日伊現代芸術展最優秀賞、特別最優秀賞、日仏芸術2000年現在リヨン日本名誉総領事賞、オーストリア賞、第2回バンコク芸術博覧会、シンガポール王女殿下認定タイ王宮芸術家、日・タイ・オーストリア世界芸術大賞、第2回世界芸術大賞、ハンガリー日本芸術文化大使ハンガリー日本友好協会、イタリア・モンテフェルトロ公園芸術祭ラファエロ大賞、EXPO ARTEC 21 欧州造形美術名品賞、チエロ日本現代美術の新世界展芸術民族の未来と栄光賞。

渡辺徹夫

WATANABE Tetsuo

託された人類への「希望」を象徴



再生の予感 50号

●

生の予感という作品のタイトルが暗示しているように、人類には重大な任務、つまり、世界の文化遺産を子孫に伝えるという重荷がある。象徴的であると同時に夢のイメージにおいて、人類は三人の女性と、地上に丸まって横たわり、背を向けている子どもたちの姿によって表現されている。

観る者の視線は、横たわり、脚の一部がない女性によって象徴化された衰退と思われる像から、自分の逆さの頭を手を持っている女性像の方へと上がり、最後に、目を閉じ、自信を持って堂々と立っている女性に終わる。人物像は、中景に見える石のブロックから毅然たる態度で現れてきたように思われる。

色の質は、緑がかった黄色の色調の同質性にあり、それは、遠くの世界と空の濃い青へと穏やかに変化している。

文/シルヴィア・ヴェスコ

出身：昭和17年千葉県。二科会、グループ展2回。



ピナクルズ奇岩群

水 彩画の色合いが、丸みのある奇妙な形の岩を、正に作家自身が無か下方から見上げた視点で描いたことを伝えている。我々の眼前に聳える奇岩群は壮大であり、前景のほとんどすべての空間を占め、他のものが見えないほどである。やや左寄りの突き出た岩は、その頂点が空の真っ白な雲に触れんばかりに伸びている。暖色の融合が非常に調和がとれており、そのおかげで、絵のすべての要素がバラ

ンスの取れた、鮮やかな構図にまとめられている。こうして、岩の塊も、正にその物質の性質や、その存在の壮大さによって、絵の下方に重厚感を与えていることを暗示している。作家は観る者に、ほとんど超現実主義的な風景自体が、中景、さらに画面の限定された境界を超えて外にまで続いていることを直感させている。

文/シルヴィア・ヴェスコ

大奇岩の
押し迫る
迫力を
素直に描写

SENUMA, Shoji

瀬沼章治



出身 昭和2年東京都。産経新聞紙上ギャラリ 20世紀芸術大賞、ベストアーティスト大賞、日本列島名画作家賞、エコロジイ・アリス・アート21認定状、フォーラム2000年記念賞、日本芸術家、リッチョーネ市アルテグラプリ、ウクライナ国立民族芸術博物館名誉作家賞、ハンガリー・ジャパン・フェスティバルグラプリ、ダ・ヴィンチ国際功労賞、ヴィラ・コラ大賞、日伊芸術親善永久会員、世界創造芸術作家認定、クリスチャン・ラングロワ認定メダリスト、芸術遺産ナガラダ認定、サロンド・ロートレック正会員認定作家、ヴェネツィア国際芸術協会認定作家、2001年上半期秀作賞、ミディ・ピレネジャボン協会賞、外遊も回。

大志保紫水

OSHIO, Shisui



人間感情を温かな眼差しでキャッチ



どうしたの

写 真作品は、たびたびの海外旅行のもので、この作家の心を打ったいくつかのテーマに対する特別で繊細な感情から生まれた。夏の暑いある日、北ヨーロッパのどこかの町で、子どもが、蒸足になって、小さな川の冷たくて速い水の流れに足を入れて涼んでいる。子どもは縁石に腰掛け、靴は脇に置いてある。作家は、日の光が子どものプロンドの髪と読んでいる漫画本を同時に照らしている姿を捉えている。年配の女性が立ち止まって子どもを眺め、今にも話しかけようとしている。作家は、子どもが頭を上げて、漫画から注意をそらす前の正確な一瞬の静止した雰囲気をつ捉えたのだらうか。この沈黙の交換によって生まれた感情の緊張は大変詩的である。石の小川によって生じた遠近が、観る者の眼を遠くから女性と子どもの感情の親近さへと導くかのようである。

大志



リンダーホーフ城庭園にて

この作品においては、彼女は円熟した作家として、客観的な探求者の眼を好んで子どもたちの姿に止める姿勢が窺える。後景の何世紀も経った巨木や人々が憩う緩やかな傾斜地のある、緑の繁茂した気持ちの良い自然環境が、どっしりとした石のライオンの背景に広がる。プロントで、微笑んでいるふたりの子どもは、ひとりとはライオンの背に寄り、もうひとりとは喜びのあまり表情を崩すほどだが、カメラの方を向いている。たてがみをつかまれた猛獣は、こうして、夏休みの旅行中と思われる子どもたちの楽しい玩具になっている。作家が選んだ下からの角度は非常に面白く、そこに組み込まれた自然環境に対して、彫刻の力強さと安定性を際立たせている。同じことは、ふたりの子どもたちの抑え切れぬほどの生氣と、という危険に対してかはわからないが、見張っているかのようなライオンの雄々しさとの対照にも言える。

文／シルヴィア・ヴェスコ

出身：大正8年福岡県。師・山田松雄（鶴心書道会会長）。鶴心書道会農林水産省支部所屬。鶴心書道会賞受賞・入選。鶴心書道会入選3回。農林水産省総合芸術展事務次官賞・農林水産大臣賞・無類賞、産経新聞賞特選・金賞、書道文化世界賞（美術面）No.17、中日文化交流奨印20周年記念特別賞、文化庁東洋美術展特選。外遊17回。

増田 晴昭
MASUDA, Akiyuki



ネパールの少女



ネパールの子供

異国の子どもたちの印象的な瞳

構

國の取り方は極めて独特で、ネパールのふたりの少女が奉納彫刻と思われるものの傍にしゃがみ、その彫刻の前には、色彩豊かな供え物が置かれている。正に色——

子どもたちの洋服の真っ赤な色が、その深い眼差しとともに、作品イメージの完全な主役である。小さな手の恰好、寄り添っている姿勢、そしてカメラのレンズに向けられた大きな瞳が大人に信頼を与えるような意志の強さを強調している。

常とまったく異なる雰囲気、作家がカメラを持って立ち止まった情景に浸透している。何か楽しいことをして遊んでいるところを写され、明らかに幸せな三人の子どもたちは、自分たちを取り囲む貧困には無関心であるように思われる。作家の有能さは、おそらく貧しい環境とわかるのにわずかながら十分な要素、半ば錆びたブリキ缶、石の壁、小石や砂利の中庭を選んだところにある。

文/シルヴィア・ヴェスコ

出身 昭和23年福岡県

石田観仙

ISHIDA, Kansu



石より伝わる慈愛と優しさ



たえ 台別 高42×幅24×奥行20cm

石のような自然の素材を通じて、優しく強い感情を表現しようとした彫刻である。事実、この荒い素材を使って、滑らかではないが丸みのある姿が造られている。灰色の石のざらざらした面はすべて、ツチとノミによって触感を与えられている。石自体が最終的な形を示唆し、作家はその手腕によって、この母と子の表現に生命を与えるため、持てるすべての技術を使っただけのようである。頭を粗削りの子の方に傾けた母の慈愛は、優しい揺籃のようには思われる。人工的なものと、その逆である本物の自然の石との間のコントラストが、この彫刻をいっそう強くメッセージ伝達における素材の力の一例にしている。情熱、力、そして簡潔さ、すべてが、これほど人間的な慈愛のような感情をイメージを通じて感受させようとする驚くべき意志に閉じこめられている。

文/シルヴィア・ヴェスコ

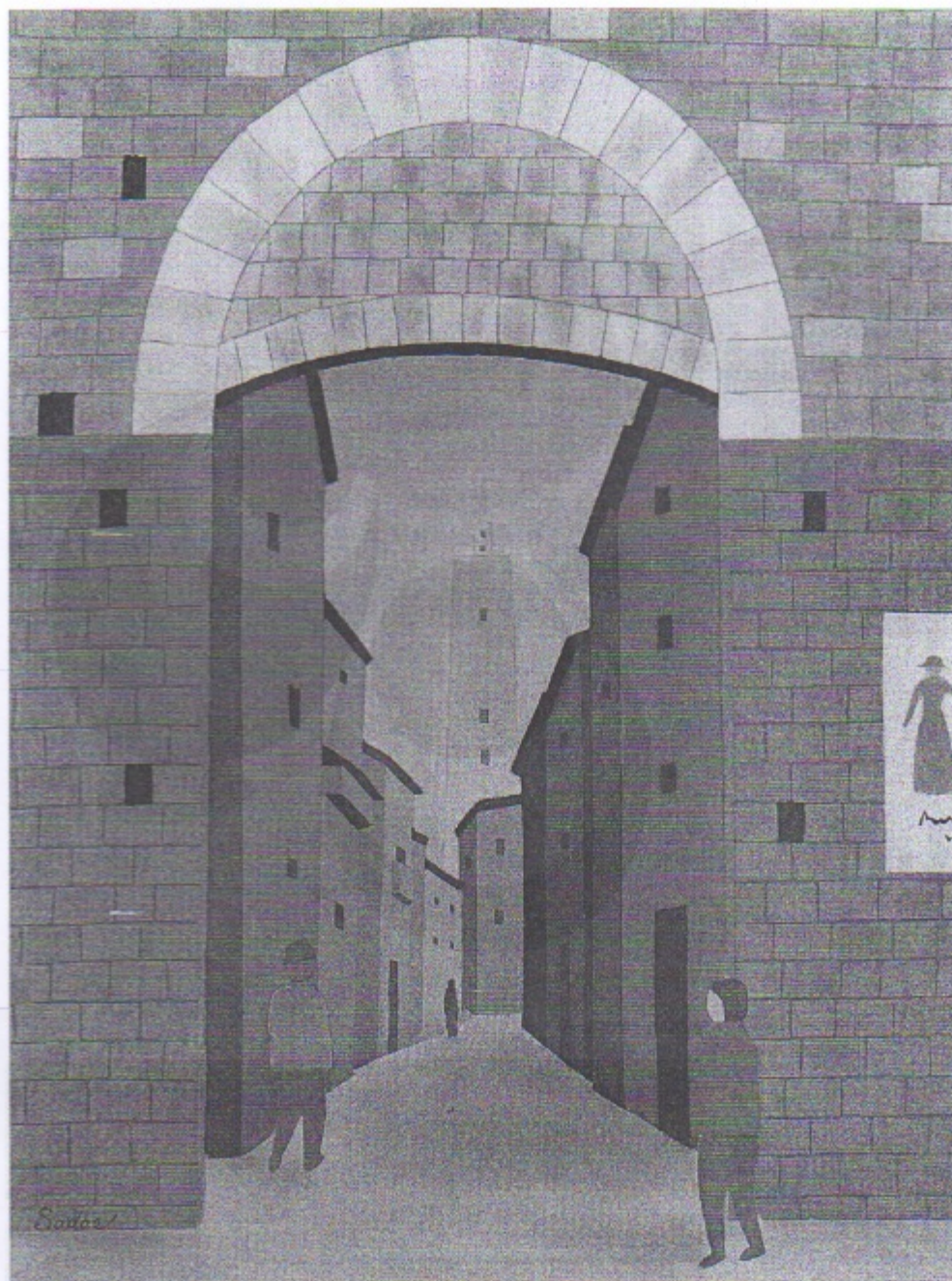
出身：昭和36年愛知県。本名：充弘。師：坂本清。石田彫刻工房代表。2001年第51回中部二科展新人賞。外遊4回。

柏村貞江

KASHIWAKURA, Sadie



ローケツ染めがもたらす柔らかな中間色の世界



城壁 P25

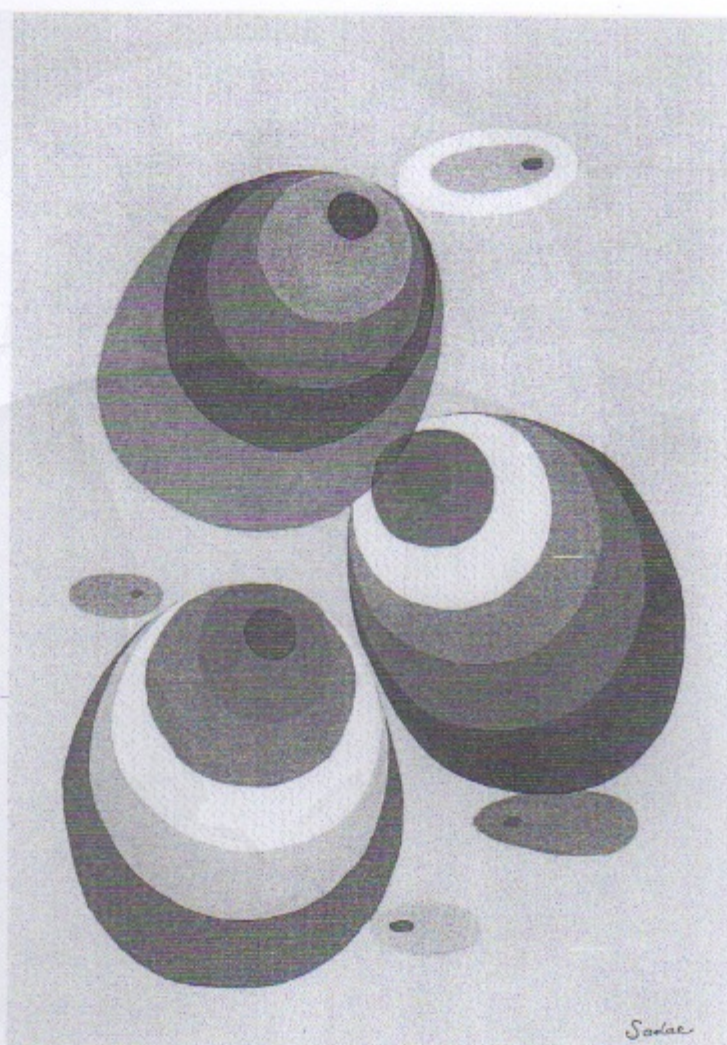
サン・ジミヤノの城壁の出入り口の遠近観である。前景を強く特色づけているのは、壁の煉瓦の色の違いである。入り口のアーチの石の白さが下方の壁の灰青色とコントラストをなしている。主要道路に面した内部の構造は、茶色のさまざまなトーンで次第に薄れ、遠くの塔で頂点に達している。この作家の偉大な能力は、ローケツ染めのような非常に複雑な技術を筆で描いた絵面に極めて近い効果に達するまで利用したところにある。構成力は、背を向けて黙って塔に向かうほとんど幻想に近い三人の人物の、視覚に訴える強いインパクトと結びつけられている。明暗の戯れが驚くほど巧みに利用されている。

「春の訪れ」は、春の感覚と色調から生まれた内面的な印象によって作家自身の言葉から溢れ出た極めて象徴的な抽象作品である。さまざまな色の段階をふたたび用いて、空色の形は、卵形の仮定的な極に向かって色濃くなっていく。同じように濃いバラ色も変化し、その上に重なっている空色とはほとんど混ざり合っている。三つ目の柔らかい形には、春らしい緑、明るい空色、そして茶色が使われ、大きな赤暖を含んだ色のシンフォニーを奏でている。

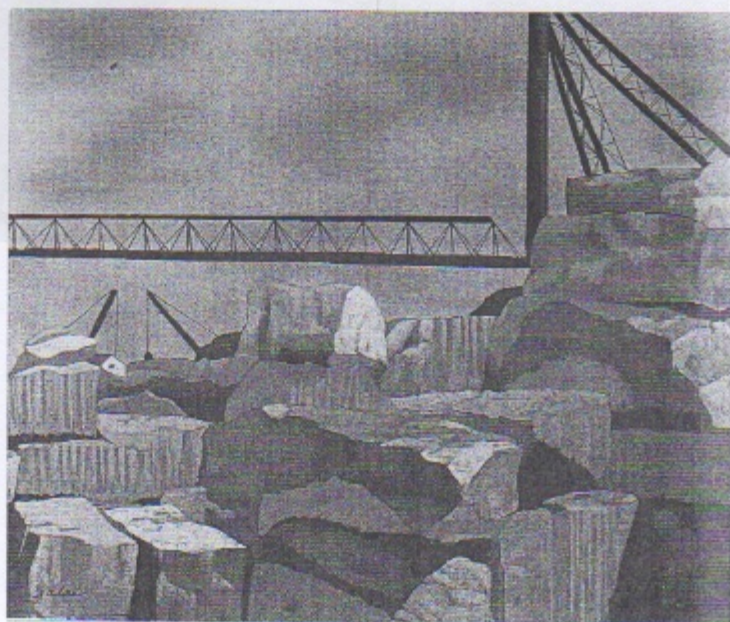
春の息吹にそよぐ新しい花弁のように、これらの形は、我々には不明の目的に向かつて開かれた空間の中を互いに離れ、浮いていくように思われる。「採石場にて」では焼けつくような暑い陽差しの中、採石場の二つこつした石の堆積が、スペインの未開の地を暗示しているかのようである。

採石場の巨石がどのように積み重ねられているか、また、それが、作家が感じたように、そこで働く人々の遅しさと労苦とにいかに対比されるかを極めて簡潔に伝えている。人物は見えず、遠くに見える赤い屋根の建物に在るのかもしれないし、直角になって作品全体に遠近の次元を与えている力強いクレーンを動かしているのかもしれない。

文／シルヴィア・ヴェスコ



春の訪れ 68X49cm



採石場にて F25



古

代の漢字の書体が、佐藤光峰の書芸術の出発点である。今日でも使われている漢字を扱っているといっても、作品では、その意味よりもむしろ絵画的価値が考慮されている。現在の漢字の祖先である、ほっそりして含みのあるピクトグラフのように、白い紙の上の真っ黒な墨の明確な跡が最高の表現力で示されている。右

から左へ墨の線を一掃するように思われる「風」の力と、濃くなったり薄れたりするが、少しのためらいもない太い筆使いは、グラフィック上、また色彩上、墨との完璧な均衡を創り上げている。文字と白地は、そこに書かれた漢字の明確さによってよく対照をなしている。

純白の中に
展開される
濃墨の
抽象世界



佐藤光峰
SATO, Koubou

作家の創造的ファンタジーと技術的な手腕は、墨で書かれた、極めて象徴的で抽象的なこの作品によく表されている。先の作品と同様、ここでも、太めの筆とあまり薄めていない墨が選ばれている。作家の熟練ぶりは、この芸術を悟りに達する道のひとつとして用いた神僧のように、決然とした筆使い、ためらいがまったくないことに示されている。いかなる誤りも許されず、いかなる汚点も認められない。作品制作

中のごくわずかな書き直しも、最終的な効果を決定的に傷つけてしまうことであろう。万年の寿命を表す亀、漢字の意味を知らないヨーロッパ人の目にも、このめでたい書道作品は、ともかくも積極的な強いエネルギーを示唆するであろう。象徴的な価値をすべて担った漢字が、表現力のすべてを伝えるために、まるで伏い枠からはみ出すかのようにある。

文／シルヴィア・ヴェスコ



東洋美術
光峰の
筆白の中に



光峰

出身昭和2年北海道・網走・光本三千萬。
高知県立理理事。1983年高知県オールドパワー展特選。93年第21回全日展入選。
98年第16回安芸全国書展書道美術賞。99年第16回サンケイ展入選。高知県オールドパワー展高知県くし文芸財団理事長賞。
2000年第18回安芸全国書展入選。89年、92年アメリカ（カリフォルニア）日本人小学校・中学校校長・幼稚園園長。

山口智子

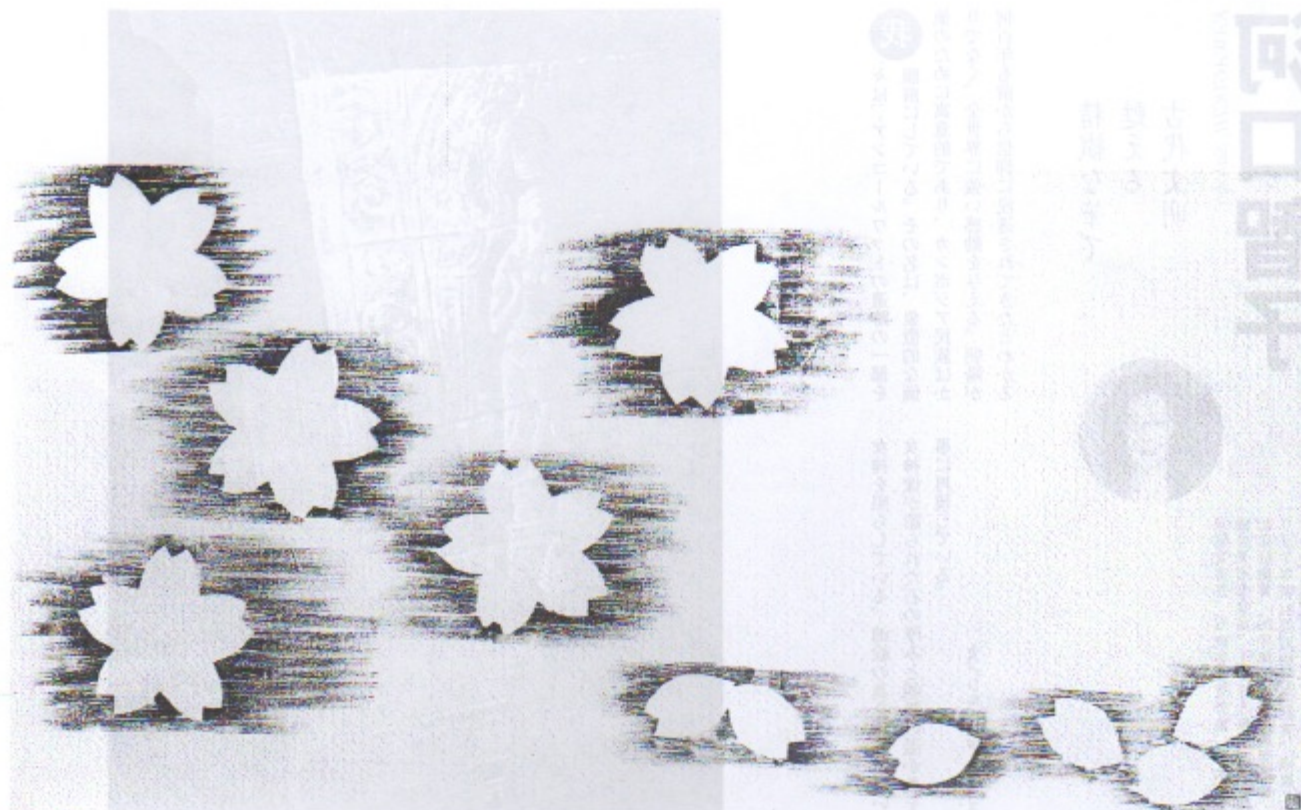
多田 櫻井秋水

SAKURAI, Shusui



伝統美を
打ち破る
斬新な
感性

出身：大正15年群馬県。師・武士草風。現代書作家协会理事。東京セントラル美術館賞。特別賞。大澤賞。戦後文化賞。文化勲章。



春の情景

春

のシンボル、というよりも、それ以上に日本のシンボルである桜の花が作家の作品の主役になっている。しかし、前衛芸術家である作家は、この多弁の花の古典的な表現にとどまらず、ステンシルに似た技法で、好んでさまざまな配置で何度も表現している。画面の左に、様式化された五枚の大きな桜の花が黒い輪郭によって認められ、明るくて不特定の背景とよ

く対比している。ここには見えない、別の花から取られた何枚かの花弁が、画面の右下方にデリケートに散らされている。書のように、この作品においても墨だけが使われ、色彩のない空間は、象徴的ではあるが、確実な効果を与えるメッセージを伝えるための、最も有効な手段になっている。

文／シルヴィア・ヴェスコ

河口智子

KAWAGUCHI, Sachiko

精緻な筆で
魅える
古代文明



双橋会会員、双橋会運営委員、厚木市文化
協会美術会会員、1995年第25回双橋展
記念紅樹賞、99年第29回双橋展奨励賞、2
001年第31回双橋展奨励賞、個展1回、
グループ展2回

我 々は、アンコールワットの遺跡の一部を
眼前にしている。その名は、象徴的な値
値のために寓意であり、カンボジア民族ば
りでなく、全世界に強い感動を与える。朝陽が
何百年も前から信仰に浸透されてきたとわかる

女神を照らしている。油絵の具を巧みに用いて
女神像が彫られた石の厚みと朝陽の温かさを見
事に再現している。

文/シルヴィア・ヴェスコ



興亡 バンテアイ・スレイの朝陽 F80

多田礼子

TADA, Reiko

色彩が
戯れる
雄大な景観



出身：昭和7年岩手県、遠野市トースツ
所蔵：クリスチャン・ラングロワ認定メ
リスト、新世紀芸術家芸術家ベーター・フ
リゲル賞、岩手県芸術家入賞11回、グ
ループ展2回、外遊5回

二 の情景は、日本の北、岩手に展開してい
る。主役は暖色のある秋である。作家は
冬に入る直前の瞬間を捉えている。不動の湖と
極寒になるのを待っている周囲の自然。前景に
ある何本かの枯れた草が観る者の目を捉えると

しても、構図を支配しているのは、湖の一角で
ある。水の白い反射と、遠くに広がる薄く雪を
いただいた山頂との呼応の戯れが面白い。

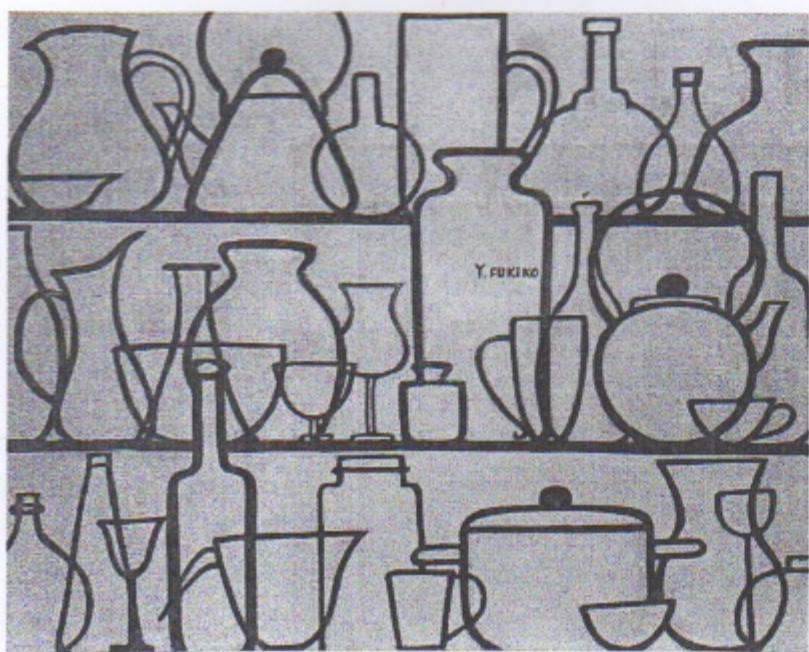
文/シルヴィア・ヴェスコ



秋沼 50号



Sea Life park F100



器 F30

丹野史子

TANNO, Fumiko

色彩の
溶け合う
幻想の世界

⑥ レットの取られた色で、巨大な水槽の真ん中にいるような、信じ難いほどの臨場感と面白さを伝えている。子どもたちの喜びが、魚や魚を指差す小さな手に感じ取られる。油絵の色を使いこなす驚くべき才能と、輪郭線なし

に人物を描く決然とした筆使いによって、人物を水と魚自身に溶け込ませている。

文/シルヴィア・ヴェスコ

吉田富貴子

YOSHIDA, Fumiko

フォルムが
強調する
絶対的存在

⑦ というテーマが特に作家のお気に入りのように思われる。三つの棚に並んだ壺、水差し、鍋、茶碗、ティーポット、瓶などが輪郭線だけで描かれている。さまざまな形が、驚くべき透明さの戯れで重なり合っている。器の

透明な堅さが、正確な背景に組み込む必要のない、純粋な形としての絶対的な価値を強調しようとしている。太く黒い輪郭線が器の唯一の存在の証だ。

文/シルヴィア・ヴェスコ

出身：昭和16年大阪府・師・相違。横浜会
所蔵。グループ展30回、外遊3回。

中嶋若根(若隆)

NAKASHIMA Wakurō (Wakurō)

墨と空間の
絶妙な
バランス

作 家は、「那智の火祭り」を薄淡めの墨により、微妙なタッチで表現するために水墨画を選んでいる。古代から繰り返されている伝統行事が熊野神社で毎年七月一日に祝われる。作家がまた子とだった時に初めて見た感

動が、ここでは、たいまつを持つ人たちの行列とささげられた香気とのバランスがよく取れた雰囲気反映されている。

文/シルヴィア・ヴェスコ

出身：昭和2年和歌山県・師・三上隆泰、
深谷悦隆、日展全美術協会全賞、日展全全
日本展絵画グランプリ1回、全賞4回、銀
賞6回、銅賞1回、チャイナデール特別
賞、マレーシアアジアティコ三賞大賞、日本
キエフ文化交流芸術大賞、ハンガリー初代
国王戴冠千代記念賞、20世紀芸術世界賞。



若隆



那智の火祭り 27×24cm [1993年第18回日展全日本画展銀賞]

ITALIA



吉田富貴子

昭和10年
生誕する
マホム子

昭和10年
生誕する
マホム子